

「女性仮託」の再検討

——『土佐日記』におけるパロディーの精神に注目して——

アントナン・フェレ
Antonin Ferré

一、はじめに

『土佐日記』の冒頭「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」⁽¹⁾という一文については、作者の紀貫之が女性に仮託して『土佐日記』の内容を語らせているというふうに解釈するのが一般的である。この「女性仮託」の意味は『土佐日記』の本格的な研究が始まった近世初期から様々に議論されてきたが、自分の内面や感情など、男性官人が自分の日記の中で書けなかったことを書くために、貫之が女性に仮託しなければならなかったという解釈が現在の通説となっている。この説はすでに賀茂真淵と上田秋成の辺りに原型があり⁽²⁾、近代になると小宮豊隆氏や南波浩氏⁽⁴⁾に唱えられてきたのだが、学者の間で支持が広まっ

たのは六〇年代以降、木村正中と秋山虔両氏が相次いで論著を発表してからのことである⁽⁵⁾。一番よくまとまっているもののなかで、秋山氏の文章を引用しておきたいと思う。

貫之は、女性筆者に自己を仮托することによって、官人貫之の立場から自己を韜晦させる。記録としての漢文日記の伝統から自由な地点に転出することができたのである。(中略) けだし土佐日記は土佐守貫之の旅上の見聞録として読まらるべきではなくて、官人身分から解き放たれた私人貫之の生身が、そこにうちこめられて息づく形姿を見るべきなのである。記録においては排除されねばならない個人の内面の表象を見るべきなのであって、これを保証するものこそ前記の韜晦的な女筆仮託の発想なのである。

この文章で明らかのように「女性仮託」に関する通説は、男性官人が記した日記の中で内面の表現が許されなかったという前提の上に立っている。確かに外記日記のような公の日記や『九暦』などの私日記においては、政務・儀式次第を細かく記し、後の参考として残すという実用的な側面が前面に出ているため、読者の感情に訴えるような内容も乏しいのである。しかしながら、男性官人が漢文で綴った記録のすべてがそういう性質のものでは必ずしもなかった。時代的に限られている現象だが、『土佐日記』が書かれた前世代にあたる寛平・延喜年間においては同じ行事儀式を対象としつつも、儀式作法の先例を後世に伝えるという実用的な目的から大きく外れ、行事そのものの雰囲気やそれに参加する人物の行動を読者に印象深く伝えることに主眼を置くような記録が多数残されている。前稿で論じたように、それらの記録は橘広相、菅原道真、紀長谷雄などの文人たちが、中国の「記」というジャンルの影響下で書いたものだが、『土佐日記』との関係でいえば特に長谷雄の「競狩記」と道真の「宮滝御幸記」が注目されると思う。

「競狩記」と「宮滝御幸記」は、宇多上皇が昌泰元年十月二十日から同閏十月一日にかけて催した、川嶋の原での鷹狩と宮滝への遊覧を伝える一続きの記録である。⁽⁷⁾「競狩

記」については、登場人物の行動がユーモラスな筆致で描かれる点「宮滝御幸記」については、紀行文である点、和歌が原型の記録に掲載されている点など、『土佐日記』との共通点が古くから指摘されてきたのだが、それらの成果を受けながら、両記と『土佐日記』の最も注目すべき共通点が記録者の自己表現の仕方にあると拙稿で述べた。⁽¹⁰⁾『土佐日記』の「女性」は、直接的な自己表現を避けながらも自らの関心に即して事柄を自由に記録してゆくという形になっており、その意味では間接的な自己表現を遂げているのだが、その立場は、集団から一歩退きながら記述の上で自らの個性的な観察眼を色濃く反映させる長谷雄と道真の立場に酷似していると考ええる。このように見てくると、男性官人の日記の中で内面の表現が許されなかったという見解には事実と異なるところがあるということが明らかにになるが、それだけでなく、漢文記録と最も異なる特徴と目されてきた自己表現、またその表現の仕方においてこそ『土佐日記』が先行する漢文記録から影響を受けたということになる。従って「女性仮託」に関する通説には再検討が必要となるのではないかと思う。「女性仮託」は、漢文日記と異なる表現領域を獲得するための手法と考えられてきたが、もし以上のように推定することに問題がなければ「女

性仮託」の意味を根本から考え直す必要が生じてこよう。

二、「女性仮託」に関する諸説の整理

まずは、「女性仮託」に関する通説以外の説を整理したいと思う。他説は大まかに言えば三つに分けることができる。

そのひとつ目は「女性仮託」を、作者が貫之であることを隠蔽する手法としてみるものである。この説は加藤磐斎の『土佐日記見聞抄』（承応四＝一六五五年成立）に伝えられる松永貞徳の見解、北村季吟の『土佐日記抄』（寛文元＝一六六一年刊）、富士谷御杖の『土佐日記灯』（文化十三＝一八一六年成立）、田中大秀の『土佐日記解』（文政十二＝一八二九年成立）など、古注釈に比較的多く見られる説であるが、そうした匿名の理由についてもそれぞれ特徴のある見解を示しており、例えば田中大秀が、この作品の内容があまりにも口さがないゆえに我が名で表すのに憚りがあつただろうと推測している。ただ隠蔽の理由はさておき、いずれも根拠の弱い説となつてゐる。なぜかといえば、十世紀後半に活躍して貫之の息子時文と親しい関係にあつた惠慶法師の私家集（192番歌）に「つらゆきがとさの日記」を題材にした絵のことが見えるし、また『土佐日記』に収載されている歌が『古今六帖』や同じ時文が編者の一人であつた『後

撰集』の中に、貫之の作として数多く採用されているからである。そこから見ると、『土佐日記』が貫之の没後間もなく貫之の作として広く流布していたことが窺えると思うが、遑つて考えてみると、貫之が存命中もすでに自分の作品を広めたという可能性もなくなないのである。そのこともあつて女性仮託の匿名説をとる近代の論説は、管見の限り見当たらない。

ふたつ目の説として次に検討してみたいのは、女性仮託を和文で書くための手段とみる説である。この説は早くも池田正式の『土佐日記講註』（慶安元＝一六四八年成立）にみられるが、岸本由豆流の『土佐日記考証』（文化十二＝一八一五年成立、文政二＝一八一九年刊）を経て、石川徹、菊池靖彦など現代の研究者にも受け継がれており、通説に次いで支持率が高いつても高い説となつてゐる。その中で石川氏の論のように『土佐日記』の「女性」を「男性的な漢土、漢詩、漢文に對し、なつかしく優しい、日本、和歌、和文の、象徴もしくは代弁者」とみる特徴的な意見もあるが、総じて言えば「仮名で書く」ことが男性官人にふさわしくない行動であり、そういう憚りを乗り越えるために貫之によつて考案されたのが「女性仮託」であるとみる見解である。傾聴に値する説だとは思ふが、香川景樹が『土佐日記

創見』（文政六〇一八三三年成立、天保三〇一八三三年刊）の中で「もとより、紀氏の古今序・大井行幸序など、皆仮字がき也。此日記ばかりを女々しとして、女にかくるべきものならんや」と指摘したように、貫之に『古今集』と『大堰川行幸和歌』のそれぞれの序を仮名文で書く経歴があるということはこの説の説得力を大幅に下げているのである。要するに、自分の名前で署名してしかも天皇の命を受けて、すなわちいかにも律令制の官人として仮名による散文を書き残した貫之が、そもそも内発的な動機に駆られて執筆した『土佐日記』を和文で書くためにわざわざ女性に仮託しなければならなかった理由が考えにくいと思う。また、もし石川氏が言ったように、貫之に和文で書くこと自体を弁護したいという欲望があったとすれば、そういう主張を男性として唱えた方がインパクトが強かったのではないかと反論することもできる。そのために「女性仮託」に関するふたつ目の説にも、それほどしつかりとした根拠がないと言わなければならない。

従って「女性仮託」に関する三つ目の解釈、女性仮託そのものが諧謔、要するに読者を笑わせる（遊び）だったと見る説を検討してみたいと思う。この説は「女性仮託」が作品全体を通じて維持されるものではなく多くの箇所です

定されており、作者が男であるということがわざとらしく読者に暗示されるというところに根拠を持つ。そういった箇所はいくつかあるが、特に印象的なのは、十二月二十六日条に「漢詩はこれにえ書かず」と、女だから漢詩は書き写せないと主張しているのにもかかわらず、一月十七日条には「棹は穿つ波の上の月を、舟は圧ふ海の中の空を」と、中唐の詩人賈島の詩を（些細な改変を伴って）訓み下した文章を堂々と載せてあるということである。しかも、記主が「昔の男」の会話文として引用したその言葉について「聞き戯れに聞けるなり」と、説得力のない言い訳を述べたりしているのであるが、そういった箇所には、作者が男性であることが無意識のうちに暴露されてしまうわけではなくて、逆にそのことをさりげなく読者に窺わせることによって笑いを招くという作者の意図があると考えられている。要するにこの説は、女性仮託を作者が男であるということを読者が承知した上での（遊び）と見るものなのだが、初めて女性仮託のいわゆる「諧謔説」を唱えた香川景樹によると、作者のそうした意図は女性仮託が宣言される冒頭文ですでに明らかにされているのである。煩を厭わず、景樹の注釈書『土佐日記創見』の該当箇所を掲げたいと思う。男もすといふ日記（引用者注…傍点原本のまま、以下同）と

しも、こと更にいへるは、頓て男のせし事を、ほのめきて、暗にあらはす也。次に、女も、といへるに、女ならざる事、猶しるし。たとへば、年ふりたらん人の、おのれ若けれども老めく也といふ、酒このめるが、下戸にはあれどのみつべしなど、ほゝゑみ興ずるに似て、実に若き人、実に下戸ならん、却て、しかはいふべきにあらぬが如く、かまへて、わざとうらうへをいへる、皆、女の女ならざるを見えしむる、あざれ也。まこと女のさまに見えんとならば、中々、かく男女のうへを、まうけ出べきならず。

景樹の見解をまとめれば、「女もしてみむ」とことさらに断るところにおいて実際の作者が女でなく男であるということとを読者のほのめかす、まさに《遊び》のような効果があると言うのである。きわめてすぐれた本文解釈として稿者はこの見解を評価したのである。

このように「女性仮託」の諸諺説は、テキストそのものの論理を生かしているだけに「女性仮託」の要因を作品の外部で求めがちな他説と比べると格段とすぐれ、生産的なものだと思われる。ただし、貫之がなぜ女性に仮託しなければならなかったかという問題に対して具体的な理由を示してこれなかったことはこの説の難点である。景樹が「女

性仮託」の理由について「たゞ、かの思ふ心ありて也けり」、池田亀鑑が「さして深い理由はなく、戯れてなされたもの」⁽¹²⁾、重友毅が「道中の退屈さに堪えかねてのしわざ」と言っており、目崎徳衛氏がそれを貫之が置かれた逆境の中からの「脱出法」⁽¹³⁾と見るが、そうした漠然とした解釈がこの説を今まで受け入れがたいものにさせたのかもしれない。『土佐日記』のパロディー性について考察する三谷邦明氏は「女性に仮託し、自己を醜化させて、「ある人」として三人称的に登場させる必要性や理由など、現在の資料からは外的に見いだすことが全くできない」と述べているが、⁽¹⁵⁾はたしてそうだろうか。稿者の見解によると、この問題を『土佐日記』と「競狩記」「宮滝御幸記」を含めた「男もすなる日記」との関係視野に収めて捉え直すことで、やや具体性を欠いている「女性仮託」の諸諺説に厚みと説得力を加えることができるかと考える。

三、「男もすなる日記」のパロディーとしての『土佐日記』

前稿で述べたように、『土佐日記』にみられる記主の主観的な表現は「競狩記」「宮滝御幸記」から学び取られたものらしいが、両方の類似性はこれに尽きるようなものでは

なかったと思う。記録の対象となる人物たちの関係の面でも、両方に著しい共通点がみられるのである。『土佐日記』では、土佐守とおぼしい人物を中心に置きながら、それに仕える一行の言動を描写していくが、それは、宇多上皇を奉戴する従者の行動を書き記す前述の両記のあり方を髣髴とさせる。また、そうした記録対象に対する記主の立場、すなわち叙述のスタンスという点でも『土佐日記』は両記から大きな影響を受けたと思われる。前稿で詳しく述べたのでここでは省略しておきたいが、その関係で注目すべきなのは、『土佐日記』の「女」が自らの内面を表現することもなく、登場人物と同じ次元の主体として出てこないという点である。「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり（中略）そのよし、いささかものに書きつく」（冒頭）、「漢詩はこれにえ書かず」（十二月二十六日条）、「これならず多かれども、書かず」（二月九日条）、「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず」とまれかうまれとく破りてむ」（跋文）といった箇所が示すように、「女」が文面に顔を出しているのはあくまでも日記の〈書き手〉、要するに〈記録者〉としてのみなのである。記主の主観的な観察眼を随所にうかがわせる「競狩記」「宮滝御幸記」にしても、表現主体と登場人物が厳密に区別されており、

記主が行動主体として出てくる場合は「史臣長谷雄、右脚を馬のために踏損せられ、従行に堪えず」（「競狩記」十月二十一日条）、「日暮れなば大和高市郡の右大將の山荘に留宿するなり」（「宮滝御幸記」十月二十三日条）とあるように、三人称が用いられていたのである。それは『土佐日記』の中で作者貫之のことが他の登場人物と区別がつかない形で描かれているのと趣が酷似しているのではないか。要するに『土佐日記』では、登場人物として出ておらず、貫之のことを第三者として描く「女」の立場は、記主が記録文の中で記録主体としてしか登場しないという公的な記録のあり方を踏襲しているものであるが、さらに言えば、『土佐日記』が形態の面においては公的な記録といささか変わらないう様相を呈するということになる¹⁶。

そこで自然に思い浮かぶのは、貫之はなぜ、自己ならぬ記主を設定するという虚構を考案するまで、そうした公的な記録のあり方を踏襲しなかったのかという疑問である。私的な日記が多く書かれなかった時代に生きた貫之が公的な「日記」のあり方しか想像できなかったため、やむを得ずそうした形式を踏まえたのだとする意見をひとつの可能性として押さえておいた方が良いのかもしれない¹⁷。しかしながら、別の解釈が可能であることを稿者はここで述べて

おきたい。要するに、貫之が『土佐日記』を公的な日記のパロディーとして書いたのではあるまいか、という観方である。以下、その仮説を支持する根拠を作品から汲み取っていきたいと思う。

『土佐日記』のパロディー性をもっともはっきりと示しているのは、「主人公」となる人物の社会的地位にあると思う。『土佐日記』がモデルとする公的な記録の大半が、身分の非常に高い人物の主催となる行事を描写するものだったということを忘れてはならない。「競狩記」と「宮滝御幸記」は宇多上皇、漢文日記に劣らぬ記録性を備え、延喜二十一年（九二二）の京極御息所歌合の有様を伝える佚名日記は宇多上皇の御息所であり藤原時平の娘である藤原褒子、紀長谷雄が寛平三年（八九二）に書いた「法華会記」（『紀家集』巻十四断簡）は同じ藤原時平、というように、いずれも貴族社会の最高位に立つ人物が主催となる行事を描いているものであった。このように高貴な人物とその従者の言動を描くのに用いられる記録の形式が『土佐日記』の中で土佐守という身分の低い人物の行状を伝えるのに応用されたとは、時代の特徴からみると非常識としか言えないのである。時代が下れば、承徳二年（一〇九八）に因幡守に任ぜられた平時範が受領としての自らの行動を『時範記』に

書き残している事例は確認できるが、それはいわゆる私日記であり、第三者に委託して綴らせたものではなかった。従って、国守程度の人の言動が取るにも足りないその人の従者によって傍観的に記録されるという『土佐日記』のあり方は、当時の読者たちの眼には大げさで滑稽なもののように映ただろう。

右のことと関連して『土佐日記』のパロディー性をよく示しているのは、そうした記録の「主人公」となる人物の扱い方である。別稿で述べたように「競狩記」と「宮滝御幸記」の両方、特に前者においては諧謔性が著しく、登場人物を揶揄する筆致が目立つのであるが、揶揄されるのは宇多上皇の従者や路上で出会った庶民のみで、彼らを領導する宇多上皇はもちろんのこと始終賞讃されている⁽¹⁸⁾。そのことは、それらの記録に与えられた役割、要するに天皇の存在感を強化させるという政治的な課題と深く関係していることを前稿で述べた通りだが、后や藤氏の権力者と彼らを囲む従者の言動を記す記録についても同様のことがいえると考ええる。換言すれば、そうした形式の記録には、中心となる人物の権威を具現化させる目的が根本的にあったということになる。それに反して『土佐日記』では、貫之に對して敬語がほとんど用いられず、賞讃されるどころか他

の登場人物並みに揶揄されているのである。貫之を、歌を詠むことすらできない無風流な人物として描く次の箇所がその好例である。

かかるあひだに、船君の病者^{ばうざ}、もとよりこちごちしき人にて、かうやうのこと、さらに知らざりけり。かかれども、淡路^{あはちのたうめ}専女の歌にめでて、みやこ誇りにもやあらむ、からくして、あやしき歌ひねり出だせり。(二月七日条)

このように「主人公」となる人物の忌憚なき扱い方においては『土佐日記』がモデルとしていた公的な記録とのパロディ的な距離が感じられると思うが、『土佐日記』の中には貫之・最良の描写もあるということに注目しなければならぬ。特に国衙の官人でもない庶民が、いまだ土佐国の海岸沿いの港に停まっている貫之に挨拶しに来るといふ場面が想起されよう。

守がらにやあらむ、国人の心の常として、いまはとて見えざるを、心ある者は、恥ぢずになむ来ける。これは、物によりて褒むるにしもあらず。(十二月二十三日条)

庶民の感慨深い振る舞いを土佐守の人柄に結び付ける行文は、前記の公的な記録を髣髴とさせる自讃めいた書き振りに読めなくはない。しかしながら、木村正中氏が鋭く指摘しているようにこの箇所は「ことさらに誇らしげに述べた

イロニー」と解すべきであろう。¹⁹⁾「競狩記」「宮滝御幸記」などにみられる君主賞讃の論理を考慮すれば、その解釈はなおさら有力となろう。要するに、この箇所は公的な記録の機能を意識したパロディ的な記述として読んだ方が良いと思う。

また「主人公」の遠慮なき扱い方との関係で、そうした「日記」に書き込まれる内容に対する記主の評価が注目されよう。公私の別はともかく「日記」の記主は、そこに書き込む内容に対して自信を持ってその社会的な意義を認めていたのである。「競狩記」「宮滝御幸記」などは、儀式運営の上で活用できる先例を伝えるものではなく、一見娯楽文学としての様相を呈しているものとはいえ、以前に触れた天皇の言動の記録としての政治性もあって記主たちが誇りを持って記録に携わっていたのである。「競狩記」の冒頭に「今其の事を実録し、以て後鑑に貽^{たづな}さん」と、宇多上皇の言動を後鑑に供する長谷雄の文言や、「宮滝御幸記」の跋文に「嗟^{ああ}乎、人意の同じからざるは、譬へて猶ほ其の面のごとし。相従ひし者は実を見、以て頌歎を為さん。相従はざりし者は虚を聞き、以て誹謗を為さん」と、上皇の振る舞いに対して世間の正確な理解を乞い願う道真の言葉においては、記録内容の社会的な意義に対する記主の自信が

確然とみられるのである。それに対して『土佐日記』の記主は「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず」とまれかうまれ、とく破りてむ」という一文で筆を擱く。作品の中に書き込まれる事柄が忘れないものであり、それを書き尽くせなかったのは残念だと言いながらも、この日記を早く放棄しようという発言は、記録内容の社会的な意義を宣言する公的な記録の態度を意識しつつひっくり返すという趣になっていると思う。そこにも、『土佐日記』の「日記」としてのパロディー性を読者に納得させる作者の意図を読み取ることができるのではないか。

もうひとつ、『土佐日記』の「日記」としてのパロディー性がよく現れているのは、この作品に用いられる登場人物の匿名化と年時の臘化という方法であろう。周知の通り、この日記の主人公たる貫之をはじめとして『土佐日記』の作中人物のほとんどが匿名のまま登場するのであり、実名の代わりに「ある人」「ある女」「翁人」「稚き童」といった臘化した呼称が用いられている。また、同じような臘化の方法がこの日記に描かれる事柄の時間設定にも応用されている。『土佐日記』に伝えられる内容が承平四年末から翌年始にかけての事柄であることは、貫之の土佐国補任の事情を伝える外部資料から容易に推測できるのだが、作品

自体はその年時を正確に伝えず、冒頭文において「それのとし」と臘化している。このようにおよそ「日記」には欠かすべからざる「誰」「いつ」という情報をことさらに不明確にする『土佐日記』の方法は、この作品が孕んでいる虚構性、あるいは反記録性を宣言したものと解釈できよう。この作品に数多くみられる地理の「誤謬」や、自然を实景として把握するよりも、それにまつわる歌語や対句的配置といった修辭的論理の統一性を重んじる『土佐日記』の傾向を視野に入れば、その解釈が一層妥当性を増してくるように思われる。しかしながら、ここで注意しておかなければならないことがある。すなわち、そうした人物の匿名化と年時の臘化という方法が作品を通じて維持されるのではなくてある箇所では正反対の方法がとられている、ということである。人物については、昔話の種として言及される阿倍仲麻呂や在原業平といった存在は別として、この作品に直接登場する人物のうちに「八木のやすのり」(十二月二十三日条)「藤原のときぎね」「橘のすゑひら」(兩人とも同二十七日条)「山口のちみね」(同二十八日条)などは、いずれも伝記不明のため実在人物かどうか確認するすべはないが、土佐国衙の官人らしい彼らについては記主がきちんと名前を表記している。また、年時については一月二十

九日条、爪が大変長くなったのを見て「日をかぞふれば、今日は子の日なりければ、切らず」という箇所が注目される。この箇所は、手爪を切るのに丑の日を吉とする当時の信仰²⁰を反映するということは諸注の指摘する通りだが、そこで気になるのは、一月二十九日が子の日なのはまさしく

貫之が帰京する承平五年であり、要するに具注暦をさえ持てばこの作品の時間設定を本文中から遡行して確定できるということである。このように、意外なところに記録性を保持するこの作品の傾向からすれば、主要人物の実名を上げず、またこの作品の時間設定を不明確にしておく作者の姿勢は、作中世界を現実から独立させ、純粹な文学空間を拓こうとするような意図のものではなかったと思う。むしろ、一種の記録性を見せかけると同時に、どの「日記」にも欠かすことのできない基本的な情報のことさらに保留することで滑稽な不調和を生じさせ、この作品の「日記」のパロディーとしての性質を讀者に納得させるということが、作者の意図なのではないかと考える。

以上見てきたように、『土佐日記』は登場人物の相互関係や記主の彼らに対する立場の面では公的な日記のあり方を厳密に踏まえているのだが、他方では中心的な人物の社会的な地位と記主による扱い方、記録内容に対する評価、登

場人物の呼称や時間設定といった点においては、そうした公的な記録の規則にことさらに違反することによって「男もすなる日記」をパロディー化する作者の態度が顕著である。

さて、話を「女性仮託」に戻せば、この日記の記主を土佐守に仕える男性ではなく公職を持たない侍女に仮託する方法もまた、男性官人が記す公的な記録をパロディー化するというこの作品に一貫してみられる精神の所産ではなかっただろうか。貫之が活躍していた時代においては、歌人伊勢の作と伝えられる延喜十三年亭子院歌合の仮名日記などの事例が示すように、一部の女性たちが男性官人の記録と趣旨がよく似ている記録に携わっており、また前記の歌合に専門歌人として参加していた貫之がその事実を当然知っていただけでなく、自分の日記を仮名で書く女性に仮託するという発想をまさしくそうした事例から得たと考えられよう。ただ、「男もすなる日記」といふものを、女もしてみむとてするなり」という一文が示すように、彼は『土佐日記』の「女」をあくまでも「男」、ひいては「男」の書く「日記」との距離を置くための存在として活用したに過ぎない。また「男もすなる日記といふもの」とあるごとく、男性の書く「日記」の実態を直接知らない女を記主に仮託しなが

ら、真の作者がそうした「日記」を熟知している男であるということ随所に窺わせる『土佐日記』の精神は、パロディーであり得なかったと稿者は考える。

四、距離化という方法と『土佐日記』の課題

以上の議論をまとめてみれば、「女性仮託」は男性日記に許されない感情の記述を正当化するものでもなければ、和文で書く手段でもなかったと思う。『土佐日記』がパロディー化する「男もすなる日記」に対してコミカルな距離を据えるための装置だったと考える。そこにおいて素朴ながら重要な問題が出てくる。すなわち、貫之はなぜ、「女性仮託」という虚構を考案するまで「男もすなる日記」をパロディー化したのかという問いである。本節では、この問いに対して稿者なりの見解をいささか述べておきたい。

『土佐日記』の読者層と思われる男性官人にそうした公的な記録のパロディーを読ませる貫之は、読み手を笑わせることを当然意図していたと思う。その関係で注目されるのは、この作品に一貫してみられる自嘲のトーンに他ならない。土佐守という身分の人の行状が公的な記録のあり方を踏まえて描写されるのが滑稽であるということは以前に

述べた通りであるが、結局のところ笑い草にされるのは主人公の貫之その人である。ただ、だからといって『土佐日記』は〈笑い〉の文学に完全に帰納させ得るのかと問われれば、そうでもないと稿者は思う。なぜかといえば、どの観点から見てもコミカルに読むことのできない要素がこの作品に豊富にあるからである。言うまでもないのだが、女子の死とそれに対する両親の哀惜、都への憧憬、また作品の終盤近くに濃厚さを増してくる無常観などがそれである。

女子の死については、それが虚構であるとする意見が古くからあるということは周知の通りである。確かに、寛平九年（八九七）、三善清行が備中介から解任されて都へ出帆するに当たって、地方で亡くなった子を悼む「晩□□□□□□□宜婦洛、解纜之次、イ□□□□、適寄二一章、廻棹停舟、立次三来韻」〔扶桑集〕巻七、哀傷部・墳・6〕という絶句を残していることが注目されよう。特に、亡児を国に残して空しく帰る空虚感を吟ずる結聯「今朝寂寞として空しく帰り去らんとす／更めて哭す庭に趨りて誨^{あそ}へるものの存せざることを」が「数は足らずで帰るべらなる」（古今、羈旅・412、詠み人知らず）という古歌を踏まえて歌を詠む場面（一月十一日条）や、任地で生まれた子供を

抱いて船から降りる人々の姿を見て「なかりしもありつつ
帰る人の子をありしもなくて来るがかなしき」(二月九日条
と、亡くなった我が子を思い出して嘆く母親の和歌などと、

表現上の影響関係こそみえないものの基本的なところで相通ずる面がある。しかしながら、『土佐日記』における亡児の主題がいかに先行作品の話を想起させるとはいえ、だからといって虚構であると積極的に断定するほどの根拠を見出すことはできない。また、『土佐日記』に漂うメランコリーの雰囲気は作者の完全に演技したものとは断定し得ないだろう。作品世界と作者の人生を容易に結びつけるのは文学研究の慎むべきことかもしれないが、目崎徳衛氏が詳述しているように『土佐日記』が書かれた時期は、貫之が哀傷の思いを多く抱えていたものだったのである。『古今集』に次いで『新撰和歌』編纂の命を彼に下した醍醐天皇は、貫之の土佐国赴任の延長八年(九三〇)に崩御し、さらに貫之の庇護者として知られる藤原定方と兼輔も相次いで承平二年(九三二)、同三年に亡くなり、貫之はその悲報を土佐国赴任中に受けたと思われる。貫之は帰京後、数年間も官職に就かず⁽²⁾にいたのだが、それは彼にとってそうしたバトロンの後見がいかに重要だったのかをよく物語るのだろう。貫之は天慶六・七年(九四三・四)頃、『新撰和歌』

をある貴人に献上したときに、帰郷後の彼の状況をその序文の中で赤裸々に描写するが、そこにじみ出ているのは、老人が独り残された痛ましい孤独感なのである。

貫之秩罷帰日、将^レ上^ニ献之^一、橋山晚松、秋雲之影已結、湘浜秋竹、悲風之声急幽。伝^レ勅納言亦已薨去、空野^ニ妙辞於箱中^一、独屑^ニ落涙于襟上^一。若貫之逝去、歌亦散逸。右のことからすると、土佐守の任期を終えて都への帰途に就く時の貫之が、悲喜こもごもの気持ちを抱いたと容易に想像できよう。都に帰る喜びが、赴任先に残す死兄への哀悼と老化に伴う無常観と相絡んで彼の心を複雑なものにした——それは少なくとも『土佐日記』に伝えられる内容だが、そうした相矛盾する感情の葛藤を清算することこそが『土佐日記』の課題だったのではあるまいか。もしそうであれば、自己ならぬ第三者の眼を借りて自己を見つめる貫之の方法が了解されるだろう。要するに、帰京の旅行につきまとう自分の混乱した心があまりにも複雑だったため、それを直接的に取り扱うよりも、外から客体化して凝視する方が把握しやすかったのである。また、この作品に底流する〈笑い〉の意味も、同様の論法で解釈できるのではないかと思う。すなわち、しばしば自嘲的な調子を帯びるこの〈笑い〉とは根本的に自らと距離をとること、言い換え

れば前述した複雑な思惟からの脱出を目指した方法だったのかもしれない。貫之は、記主が登場人物と同様の次元には参加せず、傍観する立場を保持する公的な記録のあり方を踏襲した真の理由は、その辺りにあったかと稿者は想像する。

五、終わりに

『土佐日記』は難解な作品である。滑稽であると同時に憂愁に満ちており、ある箇所で書かれたことが別の箇所で否定されている。そのために、この作品の成立事情をよく知らない我々には、その主題と創作動機はどこにあったのかということを非常に把握しにくいのである。この小論は、推測に推測を重ねる形でこの問題に挑戦しようとしたものだが、結局のところ確実なことはわからないというのが実感である。ただひとつだけいえるのは、「競狩記」「宮滝御幸記」など、貫之が『土佐日記』を書いた時に念頭にあったと思われる「男もすなる日記」との比較検討を進めれば、『土佐日記』が抱えている数多い問題点の一部が解明されるのではないか、ということである。

【注】

- (1) 『土佐日記』からの引用は、新編日本古典文学全集（小学館、一九九五年）に拠る。
- (2) 賀茂真淵説は、加藤宇万伎の『土佐日記註』（明和五〇一七八年成立）の頭注に「師説」として掲げられる。上田秋成説は、秋成自筆本『土佐日記解』に附された寛政二年（一七九〇）の秋成序文にみえるのだが、それは上記の真淵説に影響を受けたらしい。
- (3) 小宮豊隆「土佐日記の研究」（『日本文学講座』第五巻、改造社、一九三四年）
- (4) 難波浩「土佐日記の本質」（『物語概説』ミネルヴァ書房、新訂版一九五七年、初版一九五四年）
- (5) 木村正中「日記文学の成立とその意義」（『中古文学論集』第一巻、おうふう、二〇〇二年、初出一九六三年）、「日記文学の本質と創作心理」（同書所収、初出一九六八年）、秋山虔「古代における日記文学の展開」（日本文学研究資料叢書『平安朝日記Ⅰ』有精堂、一九七一年、初出一九六五年）
- (6) 拙稿「宇多天皇と記録——菅原道真・紀長谷雄の「記」を中心に——」（『國語と國文學』第九十五卷第八号、二〇一八年八月）
- (7) 「競狩記」は『紀家集』卷十四断簡に所収されている。「宮

滝御幸記」は『扶桑略記』昌泰元年十月二十日・十一月（実は「閏十月」が正しい）一日条にかけてみられる。

- (8) 『扶桑略記』に掲載される略文の「宮滝御幸記」には、「各献和歌、云々」（十月二十五日条）、「勅令献歌云々」（同）などあるように、和歌の本文が省略されているが、『看聞日記』応永二十九年七月十一日条に「宮滝御幸記、天神御記也。累代秘藏物也。撰出之間、可進之由治定了。仍和歌等少々馳筆写之、大卷之間、悉不写留無念也」とあることや、古代の歌集・歌書に加えて、和歌が多く含まれている散文の作品名を並べた『古蹟歌書目録』に「宮滝記一帖 端紀長谷雄 奥管丞相」（「管」は原本のまま）とみえることから、原型の「宮滝御幸記」に多数の和歌が載せてあったと考えられる。

- (9) 川口久雄「古今集・土佐日記の成立とその漢文学的背景」（『三訂 平安朝日本漢文学史の研究』中巻、明治書院、一九八二年、初版上巻、一九五九年）、島田良二「平安前期私家集の研究」（桜楓社、一九六八年）、石原昭平「『土佐日記』以前の紀行文——仮名文『宮滝御幸記』をめぐる——」（『東横国文学』第三号、一九七〇年十二月）、山口博「宇多宫廷和歌の行方」（『王朝歌壇の研究——宇多醍醐朱雀朝篇——』桜楓社、一九七三年）などを参照されたい。

- (10) 拙稿「男もすなる日記」再考——『土佐日記』と「競狩記」「宮滝御幸記」の関係をめぐって——」（『むらさき』第五十四輯、二〇一七年十二月）
- (11) 石川徹「土佐日記に於ける虚構の意義」（『古代小説史稿』刀江書院、一九五八年、初出一九五〇年）、菊池靖彦「『土佐日記』——女性仮託の意味——」（『解釈と鑑賞』第五十卷第八号、一九八五年七月）
- (12) 池田亀鑑「解説」（『岩波文庫』『土佐日記』岩波書店、一九三〇年）
- (13) 重友毅「土佐日記について」（『國語と國文學』第二十五卷第六号、一九四八年六月）
- (14) 目崎徳衛「紀貫之」（吉川弘文館、一九六一年）
- (15) 三谷邦明「黎明期の日記文学——竹取物語と土佐日記あるいは古代後期の日記文学の文学形式とパロディ——」（石原昭平編『日記文学新論』勉誠出版、二〇〇四年）
- (16) 注(10) 所掲拙稿
- (17) 本稿の基となる口頭発表の質疑の時に、フェリス女学院大学助教の宋哈氏はこの意見を述べた。
- (18) 注(6) 所掲拙稿
- (19) 新潮日本古典集成『土佐日記 貫之集』（新潮社、一九八八年）
頭注

(20) 『九条殿御遺誡』に「丑日除_二手甲_一、寅日除_二足甲_一」とみえる。

(21) 『扶桑集』の本文は、田坂順子編『扶桑集——校本と索引——』（権歌書房、一九八五年）に拠る。ただし、便宜上、旧字・俗字を新字に改めた。訓み下しは、当該作品が引かれる所功『三善清行』（吉川弘文館、一九七〇年）に従った。

(22) 注（14）所掲書

〔付記〕 本稿は、平成三十年東京大学古代文学研究会八月例会の口頭発表を基にしている。席上ご教示・ご批評いただいた方々に厚くお礼申し上げます。